

写真管理もCALS/EC対応も 主役はつねに「現場」だから 現場に最適化されたツールを選ぶ

首都圏などの大都市に比べて遅れ気味だった地方における建設IT化も、地方版CALS/ECの本格化と共に近年急速に進展し始めた。地方では官公庁のみならず民間企業が、地域の業界IT化に大きな役割を果たしているケースが多いが、出雲市の今市水道もそんな一社だ。水道工事・空調衛生設備を事業の中心に半世紀近い歴史を持つ同社は、CAD化などもいち早く進め、すでに電子納品も行っている。さらに現在は設備CAD「CADEWA」と写真管理システム「現場名人」を、現場も含めた全社に導入する計画を進行中だ。

クローズアップ「現場名人」

取材レポート：現場名人Ver.3.0(富士通)
ユーザー：

今市水道株式会社
工務部 技士長 長野龍登氏 原久子氏



●話を聞いた工務部の長野氏と原氏(右)

地域の業務デジタル化を リードしていく存在

今市水道が設備関連の業務にCADを導入したのは、今から約11年前。もちろん出雲地域では最も早い時期の導入である。製品は富士通の設備専用CAD「CADEWA」だった。製品の選定を行った長野氏は語る。

「当時はCADEWAのDOS版が出たばかりで、設備CAD自体それほど一般的ではありませんでした。私たちもCADの活用の仕方を模索しながら、機能に関する要望などを積極的に出しました。ベンダーもこれによく応えてくれたので、以来設備ではCADEWAをメインに使い続けています」。これを機に同社では業務のCAD化が急速に進み、CADEWAを中心に現場の必要に応じて各種のCADが混在する環境になっていった。並行してデジタル化されたのが工事写真である。

「普通の写真だと1億程度の工事で10cm厚のファイル3~4冊分にもなり、取り扱いも整理も大変です。その点デジタルは手軽なので、急速に普及しました。今では作業員に

現場を撮影、メール送信させ、技術者がそれに指示を書き込んで返信するというのもしています」(長野氏)。

ISO&CALS/ECを機に CADと写真管理の統一へ

このように地域をリードする形でいち早く業務のIT化を進めてきた今市水道だが、デジタル化された写真データの管理も、技術者ごとに異なる写真管理ソフトを使用していたため情報共有が難しく、CADと同様にデータ互換性にも問題があった。その解決のきっかけが、ISO9001の取得とCALS/EC対応への取り組みだ。

「ISO取得にあたって、まず複数が混在するCADを全社で統一し、情報共有と業務効率化を進める必要がありました。そうなれば当然、写真管理も統一しなければなりません。CALS/EC対応という点からもいいタイミングだったと思います」(長野氏)。こうして約1年前、長野氏らは全社統一の写真管理ソフトの選定を開始。数種の製品を比較検討の上「現場名人」を選んだのである。「ポイントはまずCALS/EC対応製品であること。誰でも使える操作性。そして将来も安心して使える信頼できるベンダー製品であること。現場名人は機能・操作性とも申し分なく、CADEWAと同じ富士通関連会社の製品だけに、高い信頼感があったのです」(長野氏)。

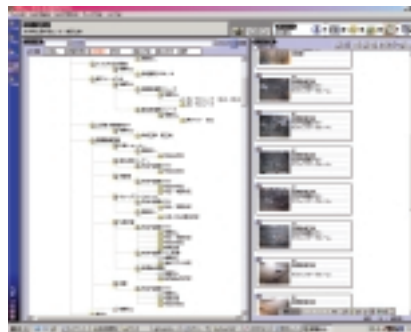
現場の業務に最適化された 「現場名人」の使いやすさ

現在、同社では工務部で「現場名人」を業務に使いながら検証し、ノウハウを蓄積するなど、同製品を現場配備するため綿密

な準備を進めている。実際に「現場名人」の操作を担当する原氏は語る。

「他の管理ソフトと比べると、現場名人は徹底して現場の業務に最適化されているんです。最初のフォルダ分けさえきちんとやっておけば後はすべてが非常にスムーズで、個々の操作も一目瞭然。もし分からないことがあってもサポートセンターが即座に指導してくれますし、現場の技術者が使うのに最適な製品といえます」。昨年同社では工事写真の電子納品を行い、直接の担当ではなかった原氏もその作業を見たが、「現場名人」を使えばこれも問題なく対応できると確信したという。「現場名人はCADを使う現場の技術者なら、特にあらためて研修期間を設けるまでもなく実務で使いながら覚えられます。当社にとってはやはり現場の業務が最優先ですから、この“敷居の低さ”はとても重要です」(原氏)。そんな原氏の言葉を受け、長野氏は各現場の状況に合わせ「現場名人」と「CADEWA」を配備していくことを計画している。

「おそらく2~3年で全社に浸透できるでしょう。本社の支援体制も整えながら、確実に対応していく計画です」(長野氏)。



●「現場名人 Ver.3.0」の操作画面